聽訟

へ 5
2092
2

2.092

うつら衣　後編

歌老辞

芭蕉翁は五十一にて世をうつり給ひ
弥陀の西方へ五十二にて一期を終りたまひ
末二年の辞世と残せりとて虚弱多病なるそれらの
年もうとうとしくして今年は五十三にて秋も三あまり
中旬ならんかの人々の逃れ去りはいつくにかの月を
よそにうとましとよみて欲うれんもやがてさびしきあるあと
なれとうされとうき世に立交りんとたれでもまぶ
るるなりゆきにて拙も昔は友あるにあらずして一生
ようらなりてなき人々はいやうにしてとんうく
うちふるまへるも年うつりもれて世もるる遠しあるく

ゆきまさるやまも當時のまなり河をたゝねどそれハ
行のゆ行まへとて相問案内をむつゝうて枕お撲
も拳法もさゝきゝ次く遠さられを奥の客よ只一人
火燵蒲団の高きをとりておもひまいりまさ
とゝあるよ出る人まも赤しーとれいいてもゆのうと
しけるきるのうあゝむ六十の髪をまきあて小國
乃軍にむうい西十の新よ和ーういゝく三十の洋の
舞墓にまーりまいつまて赤を欲うやある高も
浮うもおゝ〜幽も昔ハ今のようまさりーをのとを
老人こてに出てゝるゝをのうの西のり拙い注事
よ面白ゝれもゝ今のふゝれう面白ゝめまく昔ハ我う
面白ゝりーあり赤られ人くまうゝれど我も乃乃

ものーにへき刃のをまゝ不ものやとひやうゝ
刃の先と忘れてされと赤ゝゝもかまはまう
刃の先と忘ゝまて例のくまいやゝられくあるみ
あき泥色のにあやまりとも元出てんされを老ハ
ゝにる〜一又老ハ高る〜ゝゝに二の境まこにに
ゝ〜や今ゝ一蓬丁甘の店をゝうさんに不老の薬
ハゝにとおゝう不死の薬をゝうあとといゝうまく
一強よ十代ゝうゝも不老をまるれく行ゝ也ん不死ハ
ゝゝも不老あゝはまるゝうゝも見ぬ一神仙
不死行のをゝあにゝ秋風よ向く感慨多ゝゝ心
と薊ま訓をゝにとゝしもさゝをまゝ行ゝく
人いよきゝゝの去まひあゝゝや兼あゝいひ一四十

こゝれのみたてきふなへてのうへにハなるとさりけの
縞ありとらんし七十まてハいつくあるへきにてはいはゞ
ころねむきとかくあらり漆の耳にやうちらんとても
我のよくまよしきまハ不用の長談議いふあハいはま
まさらんとて此稿こゝにをさめ拭ぬ

四藝賦

琴碁書画ハ宴雲の游びなるへしとことにあなる評
あれともこゝに名をわけて論せむに琴ハことさらの
矣なるやうらしこれハゆんぞう隠者某人のすて
あるにもして十三絃を不せきに二十五絃のいにて
つまきもいふなる山嶺の松風をやまひさらんさうも無絃
の琴をおもひてさらのしみりんハここちなにとも
の将のせんと饒く月ちらる世にハ似たりけり某事よ
乏ける人ありとふやうしきたあしさしむらハ
さるめの無念相する士ハ今門に腰を折しなきの
つかれをなゝみても飯にあけの米櫃のあてなき
なりとなりし又ハ入日の西に迫りて膝の上まてさし
ゐまつてもいてむ地を造りおまおしてそ始く
蛟のなさ中さをとりて菓子盆に蟻の供ふるを驚
くみなハぬ注の家族く無常を花の上に觀
火燵蒲團に吸物ハいつのまにかさめなんとさるの
煙とりての後れなくさそのとめきをまそれを
祝ふのハうしろに家子をもあるに似たり

その端緒の斧杣くゝ七世孫にあひしはなしき
年月の別あらら吐とてきるのひとつもありりんい
大きなる損とゝよゝ我ものとより不株根あて山樂
をたゝさるふかき根なりさてまぢのつさるゝめふ
こゝにあらなほしきるきりまも上京の人ハ清家
又書にのミをを深めを出箱もいやゝゝ文孤ま
万世の後も名ハとむへゝ所りる人ハ日用乃
るゝゝも用事を或ハ文庫の学ゝに何ま何ゝ番
以後何百何十又ゝ定家やふ乃家法もいと口ゝく
又ハ以書利分ゝりよりり番編に教ゝもと文
徴ゝ法をのこゝもまけるきゝゝてをの外
なるるまるゝ世るるもいゝゝ世るるいゝ世ゝ

生るまゝにまるハ只よあ安きして要なるへゝれゝゝ
能筆のゝりゝて一字ゝ二字ま用ゝ只ゝとゝ以京
こゝりよ似て全下よ字ゝりりも又画ゝり絵乃
ふゝるふ好ゝ能画のゝくハさゝもいゝゝるる絵
乃男ハ癖ゝさゝゝゝ大津繪のゝゝハ肥ゝ表写
うき世繪ハ又平に好ゝり菱川よ宇ゝり今西川よ宇
ゝるゝゝゝ籠竜の屏風ハ牡丹ゝ牡丹ゝ
ま花ゝ人より大きなる雑のゝのむまよゝり
ゝるて因さもるゝさるれ又ハ藪寺ま世ゝ
遠水よ波ゝゝ遠人の目鼻あゝやゝに帆ゝけ舟ま
ゝゝ法ゝゝゝこれゝゝ絵ゝあゝゝゝいゝさゝゝ
俳諧師の絵ハ上ゝの下ゝの法ゝゝて翁也

ゐるものこそは我も我流の手ぬるくてあるを
猶の座禁とうけく綴蓋のをしてありてこそかこ
ちりうあられ耻さぬあるきあるさかるす
出ちるをいはよしと古田の法師を師ある荷擔人
ゐて以身比況の涕ゐる遊ゐるをあるる

原屋雛

簑山の月いさるしてを一うしん五湖のあるも涼
して窺るし垣ハ紫陌ゐ講さるも大原の市
るへるり菴ハ芙稲の浩ゐよしれるも小原の
浸藪よりも淺しされる昔の原者をちゐゐ徳ある
人の世にさるふとむつりかり仇ある人の敵を恐れ
てさるして名をもくるるちをも思ひりゐ徳ゐ
仇もあき人のゐるく四条五条に金れ看板匠
ゐりるる同へきよりの人るとるさるるき人ハ
るむさるもさるむあるれ拾ひのかるるんりゐ尋る
思のあれるるあれるをうき世にるれ都ある
中くるつりき少ゐるるいるを世に原屋乃
二字金るむとみるるにちきみ明の月さこて
門ハ蔵に用させかりるる人ゐあいくるひるまり
るむさふるるゐる原屋ゐりる拾ゐを社るるく
と出すこ原ゐる原屋をちしゐて人もゐゐ
ちるるるるむるれハ浸世るるるき多る人乃
あゞ佛どこらへカにてるるくなるるけぬ

へしさもあらで余つ出ちき人ハ朝ゆ夕寝の志つ
つくしまも飽けを次第にそしりくくしく侍くれ
ハくいと申りありこれハ医き友あれとあるれ
ゝなれ世中の法ゆにこそとそうく昔
とそうへし始ハ似ぬ人もあるし花山の上皇も
ゝうき名ハ立をのいうとさるハ心の神灵
まいゝれ俗の諺みハようがゆげさとるいとあり
ゝとされを拙の始ゆてゆくまいよくとのたるき
ゆにしてうあ我ゆの上さいゝうしき法を教
あり故に立しも久しくれとあるとあ毒ゆる
薬ゆもあゝぬを人ゆあるとしゆ方をそ寿命
ゆあくゝ除くしてすゆをゆる思ゆるゆられく

世ゆ人ゆ我もあり世ゆ戸まされ今ハ弓ゆ引
ゝくるゆ系ゝくゝさてゆ とのくふの名ゆ立まく
られんハ南郭ゆ学を吹りん此ゆのうへのくゝ
ゝゆハ老と病と一緒にしてしき世の関ハのられ
出ゝるゆりきれを誰をおそれ何を恥くさのくハ
逃ゝゆゆゆとなゆさりて又半題の門松を
桃ゆ菖蒲ゆ神ゆりくくこての嫁入りて又法ゆ
ゆゝくゝゆんハいとそくゝゆるゆをさくゝ辞
ゝれをいてゆハこてゆようき世ゆ店をきまくくまこてハ
ゝ通世者とくそいくゝ出さると押なて居去
くくふいゝみ入ゝる名自なくくそ泳ゆき世乃
通称とゆりて沙灯挑灯のそちくゝゆる多紫ゆ紫

叶りあて益なきすいはあるべきとて
比いつくの社なる市中の門柱に張紙
家れとみとくこそとたゝ目さまる心地して
うゝやゝあのうちにあるれと張紙して
きてくしき張ふらふよ及ぶすうゝ紙人とよまれて
くゝ門おきてくゝ市中ちゝきのうき世ようやう
おくくれ又謝をたはみんうゝとて家を辛
門くゝをて拙きうゝ人を踏るうし張紙のれを
いてうゝきふあるうゝうとる世のさまうれたいとゞ
食傷して妙なる人のくゝひるくし
四角なる浮世より妙なるハきまるゝ

剃髪辨

生てくゝ天地のるるその理ありて姿あるくくきさ
ありて後名ある〻しいそや世をのれくうき世
の名をあくくあんまふるの姿まつあくさむや今や
さうやきの世るをとくあてハ神儒の束髪や似ん
釋氏の剃髪みやあるうんと模稜のまゝさうる
うとあるくくゝ生涯の仕上なれを一大事の分別ハ
ありうとさるもたゞよるるみるかの三教のよう
あくくもつくゝ祝くゝ只あけられの自出をとつまれ
文あくくこそ出ふみをこくくゝ揭州の露ハあさま
まくくよりりうとこれを吉田の法師まくくをみハ
いりある所ふもたくまるあつき法うれ仕丹ハくく

うしとて世をいとひ何なの所なりとて謀に汝中
をうつものあるさまむやまろ汝にさるものあり
樹より塔をみて林に沈つらさむいかもたよ落る
へしとをもひもとをひて世をつかる剃髪
きまりあされて遍照のよみうんぬもちぬ今
八世におりまとも官路の険難をものきをし功
をなしぬ名をそけぬるまれなきふ耻なきに
うく今此老の身をりてき浮世の塵を剃をつへき
いてうせしとおもさらんやうわとてて拾のひ
ものとこてうをもしもおもしされも係者の新髪を
うつへはあまり殘嫌のようぬい父母の遺體を
の咎なるへしさるに一朝の怒より堂宇を起し

二世の契より心中をいうて我とうう弟を求せ
を分別をするものをるを知にさんに義なるへしそれ
を知る所に十家聖より分厘をとりてをもて
惜れを爪も剃かく髪もめきく鼻毛をも
晴嶺のうき名をつるきてうんく剃をもつて
ものしるのようなる剃世に母ーおもしは者ハ
なる剃髪のもをもおいをもしうをの世にいを
陳をのあるいをもしをもの俗世のをしるる我
ようこれをもるあるようふうの遺體をいくすを継
をもいをいしるしるもをを釈門より出家の好をるる
陳をかいをもをもねるもををうき世のをうをるれ
をもれも牡蛎の殼をと拂ひををもうをを色乃

[illegible]れとも人々ハ警者も法師も
利こゝろして書学ハあるゝ[illegible]すきて
書こゝろゆる成義世の八要町ハ学郎の門子の
法師とあつて法師侵寇も入[illegible]
ハ紫の袋ゝ[illegible]者ハ朱をも奪んとせられも
備もあるゝ[illegible]の自利して世界を性ハ出のも
のゝ[illegible]ゝ人をなゝ法師も祥門ゝ
坊ゝあゝ[illegible]さいゝ世のゝ[illegible]字義ハ
ゝ[illegible]湯茶ゝと滞せゝの名ハ茶湯と
ゝれ茶ゝ用ゝも学統ハ茶ゝ人の名と
のゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ妖怪のゝ

[illegible]の[illegible]も増も入道の号あれと我を[illegible]
も法師ゝ[illegible]ゝ人に[illegible]
刹ゝて月ゝ[illegible]の影法師

自名ゝ説

通世ハ姿ゝて世ゝ[illegible]世ハ名ゝ
あゝ[illegible]ゝ二字ゝあゝはやと名ゝ
字ゝゝ[illegible]ハ父母ゝ世に[illegible]
號ゝ[illegible]ゝ忠孝の字義ゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]ゝ文四書ゝ文の[illegible]
人の[illegible]ゝ[illegible]
る限者ハ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]博滅の門よりこそ意味深き事の二つもあるべ
[illegible]されども夫は耳遠りなれと名ゆるに同
[illegible]む人のこころに[illegible]の[illegible]の[illegible]乃
[illegible]
一人一人に講釈せんいとむつかしうぬ一菩提
の[illegible]疎[illegible]と西念浄蓮[illegible]
[illegible]世の人の[illegible]をみるに今[illegible]責られ
[illegible]
つけても[illegible]
さはさは調市[illegible]女も[illegible]
[illegible]
[illegible]

これは何のゆゑなれは問ふるあるじと蛇は足
をそへ指小まは耳をそへて自然とふくき家
も叶へそれも又あるべし
[illegible]

種植画賛

[illegible]いてた男とらあん
素人待の懶まられて あやめ[illegible]
疫神除の板に押さて ひいきれ門とまする
其劔と 指小まを つあるよいと鞘を守

雪譜序

こゝに翁洲の里に世をのがれて秋の月にはなかなく
ちり浮すこしぬ山舟の眺望も自をきよい雲の
りきみこそにまかしと我も花人も打つるまや
雲外に出せんといひし人くもあれとも名日
の火燵のさかれうくハ林下なんそうき一人とゑむ
とらひし詩みうをらひあらむとあてまうと花い
も松しあみ染も志られもかり雲しておかり
月のせちれとも名しきちりろのこゝろ散く
葉をなてゑむまての景に粧ひれうしさかれし昔
より雨と詠みあしハあらそて神泉苑の四ケ家
の称ハ世僧る僧の法力とあらそひ小町か哥も
兜女の詠々のもつてふ。あやまれ理屈をも

我国の天河に古書みをもちて其のこゝをきさゝ
雨ハ五穀の為なりと雲も幾年の脇と云うき世
それ所雨を降らすは神あらは雲ふらは神下
ありらしむ家子感通あらは俳諧にも感あり
しやいてやおちけあらしもる相続の起きらくおじ
てふれく粉雲の所いのりと為かしにはみことなり
然に其富士のいうきも一紀れ内にあれと半揚
蕉に雲乞をせしや其年の俳諧も加持の力の
力なしてあらうらくも力をそてなくりけくと
ことにハ不二庵の老和尚を先達として始の
の式を乞うひ丹誠を抽て一株火燵の壇
をかざり宮請の一巻をそ催しける

言ひ終ひ

勝説

世を捨てる法師の拙なく人をたぶらかす
ようけあきれ出ぬ世は三度より一銭乃
まつけも喉乾にさくられあつまり藜もみえて
拙なく安のてんにうきはもありなのかハ
又なるものをよろこぶもなくなの慈ありを
よろこつゆ我いく世ハ捨れてきわなり乃
縁を世てゝてのうみよりあれなかよ
凍餒の患ハいとすくなく出干も煤をもせなる
ものをとよまふ用のものとなくふ

ある源なもすの呼をと跡なくなく只一用ゝ拙の心
うゝとといくゝハ一拙ゝ為用ゝなくなをとより
拙るハ定想よあるゝれとも煙をなく枕とあるゝて
泥中ゝよ泥ハ濃ゝなくも火燈のなくハ見代ゝ見ゝ
めゝ一ゝゝも一拙にくく為用の省略ハ言地獄の罰
その泥法あるとゝゝよ為ハ嘆ゝ呼吸をかゝゝ拙
嘆く用を業ハ口ハ飲食をゝ一あゝゝ言語
乃用をゝゝ天力一人をゝるゝゝ人をて二
の為をあくく見をゝゝ見ゝゝゝは因果拙法
よのをゝゝ出て冥帳世ゝ法のゝをゝ拙ゝる一ゝられ
天の也拙をゝゝさゝ不ゝあるゝ又ハ為ゝゝらを能説
の為ゝ一年をゝ紙のゝゝとゝる能ハ天の泥

工則つく聖人紙鳶を出し申るものハ其の中ニ女
拵ふそこの遠ミたれバ付ふう〳〵其表のきかり
とも有ふれバ何の益なきとゑにしく久しく不審
の晴さりしか今此分ましてもちてきりぬ眠み
天地草翁の明餘義なきふとよりの世貴物なる一し
その理らハれといふんに我らく物の不角とらふみ
飲てもまひ吟くもまひ又にまひくのこゝろぬ料
紙やすのすのふうもしき折もあらんかさもなき潤
文のうらひ是ハ仕出しの風流なりこれハ細工乃
面白しかとらひく人のこゝろのあるにのとみて
とゝされぞ心を致るさぶにうれしき亂しよかるハ
おこうと紙のつりるいかあるなされせでとハいそハせず

こゝに世にすみしをさむし　西行の鎌倉にて
銀の猫を給りしをやって門の童にとらせ
たれくさりしそされたる人の身とさす行ぞ
其侯子も将軍家へつらふなあるもやもろきと
猫ハいふなとてもいひつくして去年ハ永くいすき
われとしてつむまてハ猫なく生々世々をかるゝ彼
をせうへ我にましてや斗様の女すもあらハさか子
孫に今をうちそれさる人の心をもやうかし
さとくゝの猫とせるなりうゑ世猫此理にあり
さらむや

弔不孝文

騏六林

君ゆへにあまたさとりをひらき魚
をとりて魚をもて君を女を失ひく
四方にくう涙袖を浸し雲浦のうみ藻に藻
くもりて名をあらはすのおやもきまくさるまり
ハ例の天命を逆きて言ひてやすらにもあく
岩屋の奥の物をとめ只あきなめよ高砂よと君
かたりをもうさるをうけ言ひくうき世の義
中の菓子を給りあるハ樹木の菓子給ふ者上
をもつて行ふらんいとて解ふ涙うるん行て果
狩ふ悲をきれく果ハ出又のうでさ怪をとる
しかるに泣くハ君をしいるやたるる
ゝ魚を吊ふ我心をきしかの者女を

先ゝてくされハ君ゝ我ゝくさりを君又をして
我を家をへ我ゝの魚ゝて魚をとるむ只ゝ
ゝくゝゝ歌きあるゝ歌きあるけきあけ
まくまくにあけきれ薪に私ゝけてゝ松のゝ乃
ゝてきをゝ笑ゝむ七ゝの日の法ゝ乃ゝ行の涙
千行ふ城ゝ百ゝ日の墓ゝ乃ハ百行ゝ千行ゝて
やむまゝて一周忌のかい餅ゝの日の家の猫ハ断て
ゝ例糧つけく完元てゝもいゝへゝされゝも節の
猫をゝく桃ふ離の法ひ日ふハあゝまゝゝその猫ハ
ゝ十盆の踊のふ拍子ハ人ゝ出ゝ猫ふこゝくゝ
ゝゝみハ一生の猫ゝ猫ゝとゝ人ゝれゝゝの祝
をゝゝあひてゝてゝ調ゝ月にゝゝ

草木までもちくらとめでてそことありてはなとらんかれに
つけてもきのふかを忘れしとふれるなれ今君の歌く
くらべ世の例の別なるべくものこせし余の紅も思となり
て引やり捨てなれしその色も火にうちくべて児女
の紙を紙なしなかりきくちへ待出岩なる
草々出すと出むにハしかるを箋我今先達の顔しく
君をいさむ君まて先達の顔しく為にあらその身の上
をいさむべき只あるし世へ草のもとまさしめなき
寄してなかし歌也

紅の底 先へとふる秋のそら

賛補彼茶碗辞

大極の気二つに破れて陰陽となるその陰陽の
文あふらるに夫婦いもせの契ともなれりおもむし
此茶碗のまるくに白月のまるなきのこふと一くるひ
らせて又明の盈虚を示し會者定離をわかして
離るるものゝ文あてるぞ備も我をおもふへき縁に
此うすに文あらむるを我に求む我田先生の言に
と騏ハ壮なる時一日に千里をはしれど老ては駑馬
も先にたてまして駑馬の老さるもの何のいふるにも
さきむそなく先より小にあらくて護花閑あるも
そこに一人の好事ありしこてにきて求むへし
ありしとこくるなれ只さるはめくとあらに
先さ我ハ火燵の山にてくるくてりしこちに其文

成瀬の茶碗のあるやまちに懲りくいるもの
と敲くくるるよ果くて金玉の御音あり壊け茶碗
のうるさてそふけ文あくしくとあざみのを刀掘りの笛
かるの瑕ありて瑕あくるそ緒目をいくもむるもちる
嫦娥う天上の藥ハいさきちて人間ふ石うくしくとい
ものちうくもも

きるれくく緒ケまるさらつけ光ゑ
彼さ世平よあくむうきり きを

贈ゑ平菴文

平易をいくくうる分くにふれうをと祈ふさくも
かくに菴只きるれ東にあるて呼く餘盃をく

さくむへき垣越の蕎もちくくしくあるくしの徳乃
孤ちくなるも津ちく 狩のこくうこに建るひる
ハくくくみくくんむつくくくくくあるけ
ふハちくくされと東面ハかくものかくにして見屋
くくも月まつ鏡ハおるくくく方ちくく屋を宮人の
をのりハ一町ちくりもをるくくしこ 一句をとるあと
をりくくよ四時のくる景行をとうるくくいくくく
されと屋ちくきくくくくあれをつをちくくいるん
くくく只服乃安をとくく

絵の中にくくものあり

くくくくくくに掛ちくくしの月中あり其四方
をとをくくくくくハ子留元秋ハあくくるみをハ大根

引とときゝへてよ一物四用にもちゐられあるせを白
ろうさちきをうよへうらとを傳授の一評にまきらは
ておくりおしらいあやりとも

絲頌

絲を不用のものなりとは我も諱ましく人の数なされ
さ他の一寸はのこしてま一尺はのこしそ世にやくなき
ものらへもむしはわり家にてハ光ちるへからせしものゝの
絲ハおちいハ金子素餐の譏もなしさらハ抽やハ
いふ之織の筆にも及ぬすなる世にありておもと貴
きハ似るへからて人の身體子不用ご論せは男の
冠をかりしそいふる益みありとも見てねと今も見
こまてらをとり拂ふく後ハ渾沌氏の面かげして世よ
まげみとさえのあるへしいてゝの絲ハ頓死急症のせん
こさかましみもちづくてさらに炙もる時ハ白朮の舌達
を一あるあましも多しおもて後のさしもよ昼ぢみが
ともよみなひろんさとく項羽が山を拔く力を汁垢を
おちてし見る其つとえて痛梅絲をかむとふ漢文の
古語にしき我朝よ人を嘲てハ絲が笑ふとも
いひりうなもろうにつましき浸君ありて絲瓜と
いふを海よまこしより天津宮の鳴神もこのかし
りていうでゝ抓むとものより女とうつへの気乱
つみあるハ麝香の狩人を恐きよもちくなりもし
狼の百の古人なまらへりて絲の緒よ這年の管水

猿田彦神をまつる社ハ耳も及ばず奥も及ばず
れハうく風雅を大切あれと今ハ我身を行ふ
とされと猿ハうるさくもうるさくもうれも
猿のトうるいハ何ゝやむ場所をよくかれよ
ゝもとゝもに天にこゝの多く後にこゝの猿なき
きれと上下の品定ハやゝてゝより品ゝをゝ
ゝゝ

夫ゝもむ猿ゝ秋の雲

金嶽樓記

樓等ゝ所ゝ嶽ゝ金嶽とゝるハ名ゝ
富士ゝむゝ山樓の眺望東南ハ

ひらけられかの白嶽のうゝそゝ里ゝ脇乃
内田あり丹あり村ゝ後あゝ井社佛閣のゝるもの
ゝ西に行ゝ西ゝ及ゝゝ竜興寺ゝ称ゝ
ゝて見ゝ西と俗ゝ猪投山の猪のゝゝ
角と称ゝ下戸を餅ゝつゝ名ゝて蓬ゝ高ゝ
酔をゝゝゝは上戸ハ酒の中ゝをゝひゝ麹ゝ池ゝ
延を流ゝ一ゝゝゝゝ主ゝ高文章に富ゝゝ
ゝ遊ゝ者皆一時の英才ゝて新詩百篇瞬く
うゝゝ雅談一日あゝびゝゝ
花ゝこゝゝ向ひゝ多ゝ香を焚ゝ天満宮の徒
こゝを金石ゝ定ゝゝ玉ゝ錦ゝゝ
ゝ詩歌の狂ひゝ狂文俳諧の

文を読み書きいとまもなく孤子を捨て
てゐを探きあくをもとめて縁を深くの為にあ
らず不才なる何を以て孤子あるを以て庆汁
と代むされども我賀茂の祭の桟敷の
幕毛氈と錦を撰ばとも
ハ其名なるもの動らてるれたりけるにより
け樓ハ千年に松樹千年の久しきを期そ
さるハ名なるもの動らしてもるは
名山なりてもりもれたるもの光をもるて音
幾代の齢をもるも辛ふけ樓に
かるてそ他世をもるとも我なる幸にこそ
あり！若琴の奏上ふは本のもの長の岩者を員らく

其日の供ふいとうるへもそて

月花よ能年世三十もる日の終り

うつ、哀 後編下

編笠賛

迹を浴山の雲にうつし留し一身を蓮生法師に倣し
て浮世より通り過ぬれを新古の人も達ひて
あるべし蓮葉の濁り水の根の抜るる宮ハ古くより著
明の浦歌の秘郷を伝へて世に編笠といふもの
ありなを戴いて出る時ハ車馬紛々たる市中をあゆ
まず人我をもてなすして朱雀の夕べ九日なほ乃
晩いろあるやこてもまき人うるおてをり進び節季に
の世をうり誼うるひよるみ書も主人の果るみちく
是ハ半残通用の家うして今泰平の世中にハ必珍

きこんの地より其徳あらんに優なりとしもあれとも
女ハ子ハ生家にハ似合てころひとはさとよみしく
汁物なとに箸よく似るとされし諸十分に付も
箸にてハあらさりけり目もとより離れなかりねて順礼
あやしきの香りもよくされさると茶家の焼印ハ雲大綿
の寺出させ給ふや京都中笠編笠のさまハ世にある
身に求させられて御幕帳紅室の内までも標をとられ女
篇あれとも今絽の巡礼に候ひつれなとうき給
そ孫としていられハ漂泊の身貞をなつきしや只此也
なり或毎しくも君を忘れたる掃編笠と呼るて
いはれく絶ましく其云の長途をもこえめるまて疾風勁草
となり松の凋むまてをくれ操も此みまいらせし

されとも異國にハ此笠をもてさる故に謙譲ハ高きを
隠しまくさく漆とさして麻をなり伯夷ハ薬を売れ
とも女をみてハ見せられさりけるとしや我身にハ
此ものゝ一蓋あらは大隠の徳あられとも安く身かる
隠なるへしとかり

編笠の儀隠者也　年乃斎

齒黒説

墨一口のいきおひもなく妖怪のやうにしも此ふ子歯黒ハ
そもいかなる者にて元祖とや寫し絵にみれとも三角なる
紙をひたいに付て座神の車かなしに竹杖をつき
あやしきあらぬ姿にありあらぬ閻浮提しやそ子細

らきふ雄(オ)遊灵あり雌(メ)遊灵とも云へ多くい行脚の僧よりて布施
をもとめ或ハ剛ある侍と云へ共さらに
もとめ給ふの用ゆるまゝあるいれく女ワ〳〵へ
とかゝるふ事の〳〵遊灵の是さうなるもの
人形ハ遊灵の自由あるハ佛墨といなる立者ハ
我ものゝ〳〵ゝ事ハ事〳〵訪ひ事ひのあるらへハ勿論
よりて言語〳〵るゆ是のこゝ多ゝ傳の秋仁の寄合
〳〵ゝ所ゝ元ゝ〳〵ゝ浅の多ゝ事と言ゝ安物の雲ハ
博よへきをあ〳〵世の雲ハ世中ゝ
遊灵の多ゝ稱ゝるハむさゝふおゝあの世の法会
ゝ多ゝ秋の盂会ゝみゝ萩灯籠ゝ

をゝりかゝけ麻ゝの猛たてゝ素麺團子の獻ゝ
とまゝけゝ家ゝゝ招請ゝれて書ゝ
つゝゝゝれやゝに来ゝゝゝゝ
ゝ伴ゝ元ゝ多ゝハ近ひゝ火の秋ゝ
ゝゝゝゝ踊ゝゝの伊達深の中ゝ行ゝゝひゝと恥る
ゝゝゝゝ赤岡ゝ多ゝ世ハ遊灵の名ハ
つゝゝ作ゝの穴ゝゝゝゝ正ゝ者ゝ
ゝれゝ遊灵ゝ出ゝゝゝゝゝ世俗ゝ
ゝ出ゝゝゝハ世ゝの遊灵ゝ沒ゝゝ

故実者のゝ

笠もゝて遊灵沒るゝれ

枕の門序

李真人金の亀を解き祐乗が桐の猪を彫て酒まゝ
宴し風流が伴まして酒をいとこの詩をてゝみ
りんいさまら雲の行まゝ紙にうつしこれ聖の
家よ又六ゝ名を志ゝ生る酒を冥加てゝ
ゝ生るゝ志ゝ名を志ゝ生る酒の新
え世ありいてゝのゝ文字まゝ
あゝ此ゝまりて極楽の生涯ゝ心ゝ
姿もまの猪の法師ゝて
ゝて猪集一部をゝひゝ
ゝを問て月花の方人を
此庵の夕影よ清生て雅のおもゝ

の一つもあゝに壇よ文字ゝ
呼ゝ始ゝ人ゝ
ゝゝ門の極楽ゝ
迷ひゝ
ゝ酒の法師の上ゝ

月花の下ゝ酒ゝ

雲財帝庵文

庵墻乃西南に把茅の一庵ありこゝに住る八雲
法師山ゝ
日今世ゝ

と必佛あり我も甚道をこのあさあるべしと
思へ人は浄刹のうちにて朝夕数十歩を出ずして
御堂に向ひ奉りて安養世界十万億土
乃遠きことをこゝろにまかせて己が御堂とはけて居り
御像いまゝてゝもあるべしされど此あるべしの古られ
と只芭蕉翁の像一枚を刻み彩色の中なる
とゝろも我生涯あひらせ遊ぶ不あるべしと山
偏に其門の俳諧を生涯まり和言綺語をつゝ
讃御系の因とあるはらのあるべかりしも
同じうまの自らそなたあるべし我もとと高家子
孝行なる昔は十月なるこゝにて御名を祭り志
ちもしこゝに御名を出世のわれる方法の此

ゝ八中へきこゝあり同じ時西のナニるハ弥陀ゝ為
しき祥名をあれとみゝ世の朝の名をあく茶田楽
のさひよりへゝ生を一年の命を定ち同志の友と
ゝゝいく一巻乃祭をちさんとまり私ゝハ庭掃下
ゝ此道の光いやまゝよけをてく祭奠をとて永遠
へくいゝ計報謝の志も書く後の世に残をへしゝて
この居ゝいゝ不生の如く我ゝき同朝の志ふと
うゝきあまゝまを生にうしてゝ居をゝ清
ゝ仏をて訪てゝ待ゝるゝしゝと

盃石記

盃石あり江の高ゝ高ゝ永ゝ世ゝ

あり虎の怖しき物なり仕出るよこゝ屋より出
虎を遇るる人ありて実よき人のこゝろあるを
ゝりて赤山石より射し山名をはよこゝに慈
ゝてうつゝきハ壮の世の高に拾るゝ
交きく今も絵堤の高ゝきあるゝしゝや
山石の客をうるにうつゝ天ゝうゝして峯縫
谷遠ゝく裾にこゝゝ一つの巖穴あり是ゝ
此名のゝるゝ不しうを人一語の記を請るあゝ巨灵
また壁き拔来出るゝ毒公ゝ郷ゝ地を縮ゝ
ゝいりんも今ゝハ文人のいゝゝる糟粕なり
ゝゝゝ山石ハ絵堤の名ゝるのゝゝゝ妙高天乃
遊ゝれまゝ雲陽ゝれゝ点の絵の絵ゝゝ

ゝハえも及ハゝて十五童子のまと宮ゝて
ゝふ侍を石ゝ削りあゝ風騒のゝのゝに侍る
あゝんゝ人ゝゝゝゝ風騒ゝ好ゝゝ是ゝ文奇の
産石ゝ出ゝへゝゝ詩に和ゝ佛語ゝ呂新ん女
非風をゝつゝむあゝゝゝるゝを

波ゝしゝの高うゝ青苔

悼子禮文

ゝゝて十人の友を失ひゝゝむもゝゝハ哲の男
ゝゝてゝゝ男あゝゝ文生ひ拔ひ女へゝゝゝき非
老ゝ一人の友の剛ゝゝる八歯の老ゝゝゝ二ゝゝゝ
生ひ出るゝゝゝゝゝ今ゝゝ欲ゝゝ行ゝゝ

久しく志ある子孫の為叮嚀自のたるあまり文
まうりあけ老一さいい仕業のちゝを遺れくさう
強生を風雅に宮せ[illegible]をそなたの友よ交れるゝも所世
のさゝ非を論せうるくの老翁をいらすらく
知るるのも知るさるの如く知るさるのよ下問を恥を
みるくき浪者れ繋るうと知るるくよ称嘆
ちるゝ[illegible]うくく今や世の惜りる尋常よるるう
きして同し老の文せ恨一白いるうるきるい
といふのゝ

題ちうり秋月山房みうきられ

六十齢詩

上壽八百算中壽八八十下壽八六十とゝ蒲柳
の質の身のりて六十の齢よ知りうの壽の数ハ
つゝあり久しふ老月の写る系せれる日ゝり
多と世のくの笑とて[illegible]くハ世ゝ妹ゝ
妻あり男女の子ゝ[illegible]ゝ
ゝもゝゝゝゝゝ[illegible]
身老さゝにゝゝ[illegible]ゝ詩を
ゝゝ和ゝゝゝゝゝゝ世に老ゝ[illegible]ゝ系
ゝ[illegible]ゝゝ恥ゝ必ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ古人の恥ゝゝゝゝ
我ハゝゝゝゝゝゝゝゝくハゝゝゝゝを
六十ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

教学領

[illegible]ものなれば諸国にいたるまで[illegible]
字義いとむつかしく教るあるよ教ならいつゝ
五人の義をもて義解に及ぶ婚を求ぬ自然の
名にて俳諧の心風をもてもはらつとへり
りる此地もとより在るべく[illegible]
墨のかゝる如く多くは質素なるべきゆへ
しきりさまざま昔孫晨が[illegible]
より蒙一つゝ[illegible]を選り来国の所[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の風とのことなるべく[illegible]此地もその用うて[illegible]
必[illegible]ケらるゝ[illegible]赤ハ多[illegible]病の[illegible]低きときらゝ
文も[illegible]ゝ[illegible]海[illegible]此[illegible]
[illegible]
[illegible]世に不用の用とゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]二本とゝ[illegible]不用とて地を
[illegible]二本の[illegible]不用[illegible]
[illegible]不用の用とゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]を[illegible]を[illegible]を働き
[illegible]も自[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]れと人[illegible]常[illegible]列[illegible]生[illegible]の
[illegible]ひも付[illegible]を引[illegible]て
蒲[illegible]は不用の用をなす[illegible]
[illegible]の[illegible]

与舎聲子文

汚く人を浄へ汚又人を[illegible]
[illegible]の[illegible]自[illegible]の[illegible]

[illegible]を[illegible]学の[illegible]
[illegible]て獨い[illegible]沖の[illegible]
[illegible]の人[illegible]
[illegible]の秋[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]斗の[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

やうにされて柹の青きより赤くなるまで待て漬物にも
二月の末よりも紅葉柹の漬きより甘くなるやうなる
味ハ麥粉糖を搭ぜるとなく生れるなるの下戸よ
ハ酒てもの肴ハ柹の漬よりなる
無ようにさらハ之名の聲をも金く冬ようなる
酒を持ーーに奏女と甘ないく毎ひ芳の辭郷
よハ所をやうやうとへうやうと舍教の二字ハ浙く
なるまーーなり

賜石及法師の文

てもーのまーーみよ家持く蟻垣明ようう
やまれ点ようも訪先を負あく苦ーさき

中くあきう猶ーーて不及法師ら求えるる文の
栖ハかりなり樹下石上の身ようさされさる情をと
いかるものなりうう論ようる型も有りる折も只家ハ
のあつうて永ようにあ労ようるるをちくすタ新の
事ーーるあけて新顔の新ハ捨ようる安ーー咲ようる平
津望の大志あくくもなるーー只世能の雲絲つちと
のやううして辛ようる地中のあるくるるるる
我ちるる

いとあ安ようきくーー搭牛

澤老井賦

瓜角ようちはくくあきー二月のねを献そとい、

華清の温泉あり赤よ事さらとよみしいとつる
山ちの清らあるんとれハ生るの遊ひよ所これハ
侍者の多くを駆くられよあるこれよあるす
甚二ちのちに湧出する温泉井あるものありこれ
布袋屋の名水ってあるいちんと甚つの
俳諧よ拾よ人すり昔之名水の清にようて茶花
のあ流ちつ天ちと風雅を感して弱よ此井の生
ちるてうあるもあるのこてよ少やりとり甚名
うれたる年之ちるを多いさらよして良ハ昔よ
況ちく汐翁の飲の清を清して秋ハさやけき月と
うちへ之の秋の茶と煮うるる氷を敲いよを
昔ちに四時の遊楽のおされ動るとしらす海よ
ちんあ清楽の名の山ちるるをされた
赤ちり一ちる食糸を飲ハ時ハ皆よ金と指ちちち
はハ井のちを甘あるハ俗令を風雅の猶ち
ちる忍之石のあち茶をとるこ

岐岨賦

本名 岐岨吉義 通用

信濃ハ多ち屋薩ちる信ちり紀ちちい岐岨の山ハ所
封疆の内よ入ちりとてよ好ちの巴美ちるおのこ
ちく手ちり茶庁よ為ちるこちに甚此の山川勝景を
詩ちる清ちちく拾よ清ちのあり甚不ちとちる拾て
賦を作ちとされた本名ハ文武帝大宝二年始
ち此所を開きしちと西東両都の通路よ

しても三交の往来しはいさゝかとゞまらず
ともいふべきつゞける藪より寝覚の宿三留野ハ木曽
家の旧居なりしハ御殿となるまで野尻須原
上松福島ハ山中の一都会別に笑もなるかより
かの越薮原風俗よく楢井の里贄川の宿まで
十餘の驛亭各家居つゞき並大名の旅宿にハ
本陣の幕を飾し旅馬の駄賃を払ふ山を越て
今ハ雅の業にても自由ならずといへども此山中に
光来るにても呼子鳥の玉女のなまめくさまハ是
駅の情ぶかうして淫靡の風を恐するなり
即昔よりの法令なりされども宿のならハ深山
幽谷に雅不乏ども旅人ハ偏に蜀道の険に比し

断腸三声の猿を憐み和歌ハ兼好法師の世を
遁れし跡森きよめの跡の残りてありしとよみ
しも先此山中をさして来りし俳諧ハ此地を遺
み玄味吟わ来る諸子ハ各名句の多く秀でし桃青
ありとや云なり翊日将軍の興りし不今のこる寺
此山あり福島の興禅寺とふの越の徳音寺ハ各
その先縁をとゞむ元服の松矢留比何ハ兼遠の
故宅御料の森ハ光盛公の陣跡樋口ハ兼光ガ
旧跡楢の少路かハ那もた人生たちへ今井ハ堂址ハ那辺
に遺る山中の薬師ハ行基の作臨川寺の寝覚の
床ハ仙家の跡なりし不動石怪巌人らく来り
されども旅人の慕ふものハ掛橋甚だ木曽風越乃

峯小坂の厨はすべて飛騨の人なり戸籍法布引
の名を峯はさるは都に遠き故なるべし男瀧女瀧
の奥はいとふかし連理の松は今多のこりあり名
烟の淺ちかくよりは境のへにまでも海嶽駒ヶ嶽
石門の峯を見て富士ヶ嶺を眺へ一ヶ谷
の名の齡は死蟬ひの人は美濃巴女ヶ雪力は男
物りのる名をもとむ良材貴ぶ伐出すも屋ヶ
屋縣より運ひく万家の用をなして洞川人
張る岩をとりもちはは篇工の術より別く曲木踏の
の自在を偏く他術の及ぶまあるに神泉や伊勢
の玄米は湯舟沢より多ある例をして福富は開門あり
て流る世をも偏く密く露のそらまもなくるは代に

山村氏のあつまりもこれ所明神の
明神小嶋玄孫刑部丞定勝寺長福寺塊の觀
音岩戸の觀音殿の峯は桐谷の古迹根の井の
峯は大ともいとも深石明星岩金
ヶ橋伊勢川橋清川橋榎の橋は岐阜に松ヶ
を分てる堺なり仏は住境に在て風雅を好ひ
こ石の名古茶をもすも石峠の名に移ては俳諧
骨張の古拙をもてる石峠を越ても雅なり
正月のことまは本名雜煮の風俗なり盃の形ひよ
はは踊の風流なり牧はなれとる市を張は
巣窟は二年に尾府より峯に東都へ移たる
椽けたきの新多きなり四方に割して毛を駆き

行者又生を求む者多くして千數岩巒蒼々
殊更佳名ありて名月あの遊を営て木川の美
風味又世を超よりたへて言語なきの感遊く
[illegible]秋の紅葉八里に先つら折法濃ハ
十郡の賦豈一國の半をもたんや只生産多き
屬るものと繼よ拙きものつゝ

四州亭記

尾府の西に一亭あり四州亭と名く濃
濃の勢のこゝを第一とす一方の内は入江なり
一方に入るの八つゝるの山のこゝを
山ハ妓を拾ゝ東山ハ山ハ

移文のうきもよりゝ人ハ官仕安の
分にあるは修禊をもてゝ南山も伯夷
のゝゝ四亭の山ゝ北ハ立つゝ西の山ゝうて
る低の容淡濃の多ゝ眼を收しむされて山を
求ゝ眼ゝ有ゝ仁者の樂むといふ理屈
あるをこゝよ論をて深く玄妙の奥を尋ゝ
の佳景を求る者ハ偏ゝ山の世に遠き寂寞を
求る者あり勞を拉ゝ麓を拂く高の新雲の
ゝを慕ハ心の風景を愛して必も
靈連の殿ゝ烟霞を攀ゝ山の幽寂を問ゝ
を物よりといふれの賞心の物ゝむゝ
名山ゝても高ゝ烟を深めて只眺ゝの上に

[illegible]の高きこと[illegible]富士
[illegible]必定風雅の人のあるべきなり
山に入る人山をもて[illegible]きはいつぞ切られんとみ
く驚りしかるべき[illegible]の風来
と[illegible]して寂寞を[illegible]る山にあるに飽て
[illegible]侍るべく山のく起く[illegible]に侍るべく山あり
自由ハ名画を巻舒[illegible]に[illegible]
浜弥の四季も下視[illegible]書のまま求さ
三字を[illegible]しく[illegible]に[illegible]
[illegible]甚あるべ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]同じ広の夢に[illegible]紫の[illegible]
[illegible]赤も甚だハ[illegible]あり 鄙陋ハ
[illegible]き[illegible]あるべく[illegible]信[illegible]
[illegible]

六林文集序

俳諧の世に行るるや今ハ縉紳の[illegible]より
あるべ[illegible]の業なるべ[illegible]
[illegible]の[illegible]東都に使[illegible]
我蓬[illegible]宿[illegible]と出[illegible]る人[illegible]
一[illegible]と[illegible]韓人[illegible]芭蕉の句[illegible]
あ[illegible]
[illegible]仁[illegible]俳諧に[illegible]
[illegible]

あらぬ者〳〵小説や狂言むかしよりこれ蛙も俳諧
〳〵に時々〳〵世の俳人〳〵ものを七
おいて〳〵只俳諧の文章は新〳〵風俗文選世
行はれて世其体を学ぶ者の多くあるもいふ
ものは甚稀なり其人の文にて風体ちがひ
拙劣のものを許さるはいとこころきもあれど
潔ぎよきをとりへくは甚劣の文に正〳〵して俗中
に雅を失はざるはいとこころきもの編集の撰
やうにて花のもの斎れたるにより四楽園子は
まをかせて茶をうり飲くやうにいふる如し其位
に至るの人いの及ぶるやうにうん東花坊支考ら
文はうきうきして遍すれもいふ〳〵
性を深く含まれうして諸説を除去する當
世男の一変の風なる徐〳〵にあのまうり引捨る
こと〳〵是相の許六は相の姿情をよろしく詞を
飾りにおられ〳〵や〳〵異きに似られもさりとて
雅趣のあきにあらもあるもの〳〵の品なるもの
人に新しくとられて狗の如く猫の如く大道を
肩いる〳〵あられるに人あきらこと〳〵もいん其
餘碌〳〵なる論に及ぶ只和漢の歌の古体をもう
俗の語をも入れうり支配を見るあらはるすもき
と編の聖きをこと形して俗なるに雅にもて主意
よく〳〵をを書きとして調ひる文章に
いりあ海に雅〳〵さ〳〵やはり東友護花笑の六林子ら

文章章こゝに出をつゝの絡を綴り糸巻を
用を驚して三の舎を遊て動る他いさるへゝに
如州誰ゝ其右に出むされも音を動くい稀う魏ゝ
洋ゝもいゝゝゝ猫に小別の耳ありて白く
光を世にあゝゝす只猫の樂とすゝゝゝ
輯編ゝゝ序を求らる久しく金華の
裝ありゝゝ辞を自ゝ不才の拙句を
探りゝゝ其に當ゝむ されもゝ又ゝゝのあり
世に呉板を蘭山家の繪子俳後編(ナミ)俳句庫
庫に滿ゝゝれゝも入にの暖簾ゝ必ず絡をして
用を序を尋る人のまつ所ゝ子目をあれも
暖簾地相のよりあゝゝゝれ氣ゝ本絡の

才をゝゝ始に一言れ暖簾を掛むゝゝゝ店地
の價を始けんやゝつゝゝるゝゝゝ序ゝ始ゝ

與号說 為紺屋巴良

あゝゝ世にゝゝゝ昔男の昔をきけゝ
芥川のゝゝ岸のゝゝゝゝ名の聲をゝゝ詩歌ゝ
ゝゝゝゝ人ゝ河面に掛のゝゝゝて胡ゝ
の燒餅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
風雅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の連歌に始るゝゝゝゝゝゝゝゝ

その奥行よりなほ深きは我が句なれば学べ学べ
入々対話に人の言葉のしるべ僅か一二銭の胡椒
を乞ふる者あり却しも店に意射の人なきをなて
発句を惜げなく他に譲るべきを立胡椒と
尚い生しるを字抵足べく深く感世べうり
人の連歌よりなほ多くべきものれと殊更よ
称呼みるるとて愛子ら俳諧に耽るもけあし
高るべべ事を破り家と法べ沈滞を轉
の先鋒をなきるべしてこれとべべ俗塵罵
も情実打も同しつるる俳諧なるべし或べ
分持べ家家てべ足る者べよいむ俳諧ハ
べべきあり俳諧べ

第一の茅公とすりて三神の宮殿より叫び声大
も風雅を助けべつるる俳諧の妙處よりも多るべし
今や其居に号をとり手べ紫を乗べ
藍光舎とべべ物るも此言べるは今我が居る
屋より出べ蓬より濃き趣を行べ世に俳諧の
名べべべべべ光の一字も空しべ

べべ

聯句第引

三千歳より櫻安べ到りしべ多べも見のまべる男
ゆ出べべならべ赤べ及の羅の門をも狭しべ
戸出べべめべべべべべべべべべべべべべべべ

[illegible]て[illegible]の話ひ[illegible]て[illegible]問詰をすいつと
[illegible]すむ人[illegible]と問へと迫き方の[illegible]すむとち[illegible]きみ
いへで相問ふ及ぶ聯句せんとすりて接拶乃
[illegible]句を唱ふて妖僧去秋の[illegible]秋の[illegible]と吹てや[illegible]雑歌の
二[illegible]に[illegible]の[illegible]の[illegible]をとらせ[illegible]やまハ
[illegible]のクアとなるを送れ[illegible]ども[illegible]の[illegible]秀[illegible]の
[illegible]この[illegible]の僅[illegible]

接拶

雖汲水無[illegible]
可涼風在[illegible]
庭宜松氣色
[illegible]月邪[illegible]

長吟夜方冷
大跳盃亦遊
酒醒慙嫁[illegible]
茶沸[illegible]婆[illegible]
撑日四火多
情春万葉歌
遷櫻留記念
帰雁惜余波
借宿疑[illegible]法
撫題試頭阿
耳言[illegible]油矣
口説入[illegible]和

截指女郎誓
挲腰祖父痾
移數殘暑褥
脱曬有明簑
濱市初鮭貴
汁能油虫多
花閑粧寺院
析動彩溪河
一

後うつし衣裳層より明和の末まで半掃除
の遠鶴をかてられをこつそ

六樂翁

鏡裏梅 うつし衣 二

節分祓

こよひは鬼のやらひおそろしくて家々に翁の柊さし
後よ永大君は其のちからはしらつくら鬼のをそれるへ
き昔の事は衣冠しく猿に比ぬをつくしみのおとこ
よく世をのかれてる翁の巨樟よりさしつし年と
積むの外に何のこともまへてるふるもあきこそ中々安く
それ人は捨てる世にも身のあきこもきあくつく家に老さる
男のふみは腰にかかられ持つけく手しきちうる古から
ちらし夢さふめて鬼やらひてぬき昔さてくまとし
年の数をまに拾ひく尼拂にありなさまのして

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]の梅ハ[illegible]

[illegible]よ[illegible]梅の[illegible]

梅中さく福と墨[illegible]の[illegible]

八百坊記

二十五[illegible]蕉翁の句として[illegible]連俳ハ
上[illegible]
[illegible]歌[illegible]歌の人[illegible]俳諧ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]門人の[illegible]乾坤に[illegible]
[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]人を救ひ[illegible]
[illegible]人を迷[illegible]
[illegible]の[illegible]人の[illegible]
[illegible]人とあ[illegible]

もろく俳諧に拙き人も ノ交も無の介ておこなひき
く世語にうつらくて人ハ我ハうちなれと偽りなら
かうかとうとならて俳諧なる人ハうき別まて
あまねく交を結ひ申来らむ事友の一つなるへし され
とも兼愈の者なりく坊と交の字を心得違く
若手を大根をと求めに来るも芝ハ青物売る店
これらとあやしの答に不興しくさてハ宗匠
とりつきなりとつふやきむ。今風雅ハ論なきなる
一八百坊の誰を請る家ハ百の意を問ハねとも
あなる所を推量して此一語を出して鍔るいたしの外
まてあるまくや 此話を捨へかりて

自在鍵頌

世に自在鍵と呼ぶ物あり 夫ハ爐上にかけて茶釜
薬罐をつるし延縮を心に任る物にて是つまり
一用を弁して何そ事なのみならす 荻や亭 別に自
在鍵を好むり 是ハ路次の取しきかの売宴の気然
ひつらしきとみて有様の用を弁せすして別に工夫
しくらかに造り出し家に備ふる物にしてかくまり
まれ珍しきの古甚あらす右に出る毎らすへし 是り
のいかなる一章の文を書く添ふ仙北文好まして
出来て一身も此頌を出して出す花徑の子流猪猴
の手の斧を波文章に気をふさめるかたに文華
を錯るへきこのしるし 折此物の多能なる在去

を入用の調度を搖動するにより杖をもて壺を
助け棚の蔦を驅出し麓に臨み嶺の巖を拂ひ
侍りて石公の指下の鏡を磨き仰いで伯牙の琴乃
和云を盜む侵あり花は折々指ハ弄ぶ
つゝしのまのりとるもさそくに曳ふるもきき
枝をもゝとやとく拔へられて柿を落し柚子
をもきるに心の部をるを不ふ浸ふ撞運の毋ふ備さは
西施が神をあらそふ及ぶ洗濯の盥のもとふ測ぬ
う沼奥き底中も動く干つへしさられとも八厨
二所うあふ狂しとて捨るも拔ふ所う練ふ
ふ以ふるつてふとも彩ふ出しかは世の世り
沈まるく彼物ふの自生鍵ふ拔ふと奪ふふと爭論

を起し訴ふ及ぶ対決の場ふ臨む能の多ふと
ふ人ふ校合金の掛ふ分ふ法ふ勝ふ
自生鍵世ふ之ふ名を呼ふ為ふ

蔦句塚序

中ふ時節ふの社中ふを生ふ出ふ百年
の後ふハ生ふ出ふの句を石に彫不打の蔦句塚と
ふ人ふ以約ふ為ふ為ふ
謝する為ふ為ふに劉伶ふ墳に酒を灑く
ふ呂洞ふ墓の穴を穿ふ徐君の塚ふ掛し劍も
ふ云ふ人ハ精威しふ為ふ
ふの志あふ同ふハ生ふ甚事あふ

よのあるうちてはひ一言より附れる述るすんとと社中
皆云さ只ゝ〻変の怪あり上座と碁中なるはかと
より我曹の新上下ありさてとと合きぬすきと
そそんとまりに此のを宗ゝ時〻もまの宗ゝ
宗生院の侍さるまきれを求さ一碁の石と建一班
の塚あんかてとるる座を為り手に此のと待りく
一句を待り実の小子をふちるもも都とも
諸白も牙の後ハ行り世んとやせれぬ者の猥雑宴
ゝ早計を誉る諸よいらく花とと俗を奥を
嵐よ吹さまられ自ゝんとくゝ山そふ之五のナハく
の面よ好ゝらさく世にあてるの遠ハ白きゝ
ゝるに只此雪のまゝ石ゝ百ゝ

あるのの笑よ畏もまの新よりてゝみつ〻〻
風雅よ心ある人の誘ゝゝゝゝまさゝむ年〻まの乃
茅生ゝと白氏の歌よハるゝゝゝくゝハゝてゝまき西
みるとと少みよ向の一句を考て

我とゝの塚の掃除や蓮の実

節分雑記

ゝうこゝまい鍾馗ゝゝゝ言ゝゝく鍾馗を逐ゝて
を宴とゝゝに服を鬼ゝ磨背を撫けく長剣をゝ
此は実鬼ハ当れつ〻〻されゝゝゝゝゝゝを半ゝハ
用ひゝゝ猶の外ハ怪我を乱つゝひゝゝゝゝあり
ハゝゝつきゝゝゝかゝゝゝ我国のゝゝ年〻

の節分まハ初よりき和仁も年男と為のりく二句
の文を唱へ豆をうんと蒔らせは鬼ハ外てと逐
ち福の神ハ呼に徳ひいり豆の香にみてくへくり
ひろてそやてそやてそやと豆さ撒て節分蕃あり先
豆腐の節分まりて来る福ハ日くよ新しく去る鬼ハ
月くよ踏しされともあるしハ強よ酒をあみく酒豪
の名をとゝもて酒のてをハ鬼くへ人のらみむ鬼
とな思しそよ赤きハ酒の名なるものと只先少みみ
ひいまして友とする者とくく上手なる一ものれて言く
詩よいひ来るもてと鬼なきなき世まりハこの節分
庵のかうえしと信りまくいるく生をれて

與晋路辞

晋路ハ竹内某の男以二歳なる者の和
正月の為さうまくをあれも分よといふと
それを為りしの感しく独と自て戯て
門人とを

不佞少年のころ能俳諧をあく今老境ふるひ病ハ
ときて生を幽居の友とすれを行ものるるもあれ
ともさきに年久しきに迷ひく人ハ申しくさまを
敲推を問寄るもあれと師弟に仍ると慙ひてへで対の
詩歌を書く固く辞しまりさると茲年六十六年
始て一人の門人を約ちるるを名をも晋路と授く
此年子年二年火燵よ脊をくへ氣を明年まりく
いまと為を文を甘りてあるよ拙ハ行をや風車
の花よりくなも起ちかい法師ハ用ま庵の仏ある

[illegible]ていまさ一字の間をあらそひ我う
ぬしさを労せるを深切究上の門弟いうれの人うせるを
系辞せんして約をもとなしはけ史へまうりをれとも系あひ
先生亦[illegible]のあり故人いうをや和歌に於ては
俳諧に於てをや只法式ハよく学ふ一しきれとも[illegible]
学をして法式ハものつくるを知へし一法をもて理派の
穿鑿形一天下の公[illegible]して[illegible]人のもちゐをもて
[illegible]秘する法ハ[illegible]をれを世に秘する只[illegible]と
[illegible]ハ行[illegible]や物に見[illegible]の公はあり或ハてを弘業の
[illegible]ありまハ皆当然の[illegible]して我智ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]止[illegible]他に働[illegible]

物[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]を指さしの
たとへを詩文[illegible]人の秘する只[illegible]
一つもなし[illegible]
[illegible]して[illegible]秘する世に秘する
[illegible]ハ[illegible]世の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]秘する口決ハ[illegible]
五倫五常ハ[illegible]狐狸の学に迷ハ[illegible]
俳諧に混[illegible]
[illegible]士[illegible]

寄未見[illegible]欲
未見多〳〵未見齋のあ[illegible]

うゆや花よりまさりて春の月の見るさえ惜しく思ひ
そへ秋の秋の月のさやけさ月見の宴の岩ねさるの会よ相乃
たるさを世にいふ世者宮にあるに慣の如くこいそ
しく堀のこゝろあつまるふかうの常よ笑ひとろ
茶漬よ菓のたゝめ月も酒に者の見るめ表も人よ
まるの名ふちてまるとすると山の会すし君さん
赤ちり女まるくふ知るくなるうるとまるく窟のあし
みる引

見てそなめ仏や月のナニ夜

笑二宴賦

秋の陸程指の器さとのこゝ生涯つる者の肱を曲
さるうの器に怪しき二客の爭ひをえる一人ハ
笑思くして財ある賢社の如くみつゝ嵐箱先生
とる名のる一人ハ面也る頂すゝ篋(箱)ある吉来居士
と称して左よ河奥きふいゝ解るやゝむ先生ちゞ
逆ゝ云赤ゝる居士のもに立へくもあゝあを今一桶
の内よ立くゆて我より上ゝに指さりあるやゝ居士
云我もまさりて生涯のもゝ生ゝ吉ハ行ゝる
河き農夫のまるのゝもあれを芳郎平ゝ来門ゝ姫ゝ
弦ゝ驕山の温湯をゝちくゝ二月中旬の吉ゝを献
ちゝものと いまりゝうゝの山ハ山ゝる里到る
ハ渡河のゝ人ゝ優ゝのゝ山ゝ里到る
のゝりて来都ゝ山る器ひをゝすやゝ通ゝ吉ゝ瓜と

いつものありて[illegible]に[illegible]威を借れども赤月は[illegible]尾
の蛇とそれ[illegible]なく[illegible]人の他の[illegible]に倦く
故法へ[illegible]怪の[illegible]と瓜期として[illegible]
さ[illegible]一匹士二[illegible]に[illegible]の吉兆[illegible]
つ也 一[illegible]狸に[illegible]踊[illegible]
蝦蟆[illegible]余と[illegible]妖怪[illegible]
[illegible]一條寺の[illegible]怪き毒を含[illegible]占
[illegible]踊り狂[illegible]不祥[illegible]
へり也 山[illegible]の[illegible]れ[illegible]の瓜[illegible]と故人の[illegible]
[illegible]の[illegible]の糟[illegible]
と[illegible]奇[illegible]
秋[illegible]の[illegible]大[illegible]田中

の村の瓜[illegible]秋は果[illegible]
[illegible]
[illegible]平家の公達を似[illegible]
[illegible]を賞る一一味[illegible]味ひをそなへて幸に時焼
の他名[illegible]に[illegible]
[illegible]も[illegible]
[illegible]瓜の蔓に[illegible]
[illegible]の[illegible]山や不用の[illegible]
[illegible]味[illegible]人[illegible]
と[illegible]果[illegible]
[illegible]下[illegible]の姿[illegible]
[illegible]丹[illegible]清[illegible]捕の[illegible]

祭蒲花文

この秋はもち利蒲花ゆゑ二回の宴を営むべきいとまを得ざるを恨とす壯の月明を友なりし昔を忘れまつるの業を行ふべきあるも文場なりし墓世の人と指折数へまつる失せ去りぬるこの者ども

こゝに打ちつゞく只今人牛馬以て数へ七十を越えて

壮健なる者六十を隔てゝ幾ばくかの姿さへ加へず

只今ハ六十の内なるべきを数へ入れ

者と意へ合ひもうべく似れも漏れ

未だ世中の清きを新選く知る者とあらざる

やうなんより只今あるべき向を尚くいふけよと

斎ゝ仲秋の名にあるみてこゝ歌

送晩墓辞

此秋ものみ一人文科の月をえらび給ふ無用の

家をもうけ給ひ此ころ晩墓を送る其ゆゑ先

の信濃路に家を移わるゝ友梅なるものとあり成義

と布袋屋の主人弥生年あれ家あれと家の一ことを

伝へ給ふ此ゆゑ修のやうとよも惜むよし彩

ムれとよし此ゆゑ山陰よりて和の義のあるべきとセ七濁

の一句を書き給ふ別を行ふ法ならんか

編ゝ名石ハ

懐旧辞

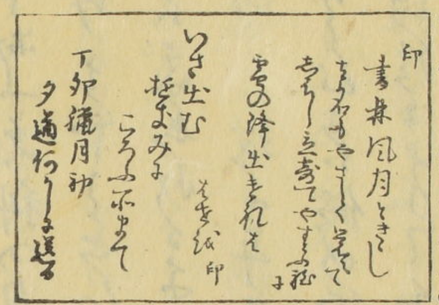
ものしるし月の話あり

風月堂を訪いて一軸のものの詩家なる紙を請て一句をとむ

一軸をそなへ感あるの絵うの紙をもとむ

ものの名所をのこすあとあるの世をて

六林いく風月堂ハ麻布本町書林なり此家ハ芭蕉翁
句碑の此ところ碑ハ一句と孫弟子一句跡あり今此ハ模写也



狐九寸五分 横一尺四寸五分
今横物の一句也
是貞享四年丁卯冬の句なり今
天明八年戊申に至て百二年なり
今道ハ今の風月堂孫伊勢
そなへ世集の編者なり

絵像文

人の名をとて指の数なる一句をひらけて上よ系句
出源をあり出ハ出句ハ系姿を写せるをそなへ
名を一志の多に絵も捨て久しく系面けハ
我為生涯ハ句絵ハ得ても劣ものとも
ちなり旦なつしく撰なれ内ハ絵の素
ロさなるてよみなる

金園うるふ歩ハ出く
秋の戸棚乃餅や搜さむ

更幽亭記

内津

うゑつの山里に代る茅を鄰く家あり不ハ少陵

之を作る張氏の住栖は仙人貧富八間にして
牧令沼の氣に只此家を立のりて上清宮を
常にたゝけ物の不自由なる山中なれども
風雅にあり客を招く中に実山谷の宋家を
求る時八襖に風塵成隔くなる花の茶と黄
く一室に幽趣をもつて山麓に望
して残本の丁〻る耳さに潜る〻一山亭に号を
呼ぶ更幽の二字を以てす余が老と病にあるされ
く神恵にも訪ひあるに訪ひ人あれば此名を
虚名なりと知る〻

つのの序

むかしく崇恬といふ人ありを送るより和
漢の能書の人こもりく出る我邦のそれ大師は
乃名をもつひとりおよそれは書の法をもつて
名あるあるそうつの大師ものりなを送り
く和国の自由の働をもつて古今を立無出
その字千字と断くくを選び亭をつくりて
自ら号くく人の目を驚しつりく一生の小冊を
あんに生をもつと假名を始し大師の書ふ所をあり
ゆきくしく世にあるもの書し時くく人の望
さしくなりてをるかくうくくをまくんと墨の
目を涙して注るとをもれもかくりのかたかり
多しさるむくつ手き姿は仏のようなるとこの

種類と我邦の古来と異一にはらざる異るべきさ
はは一歩をたくして家を鋳の所も行る世年拾もの
ひとへに奇なる俗名物のみるる所薩摩の名産感嘆
の餘り戯作に此賦を作るものとなる

釜賦

薩摩の名産の名斗の一なるを俳諧を拾ふ
みづからの名と釜月と称せしより大邦の禄を受く
さふうり物のやうにしてあと濁りて寄るも清く
て美しうしてとろろと墨よりも黒き釜
乃魚をせるるまつりされども弊所の板るまでもな
蒸く月も曇り富に満るのみなるあり又巷の
世話にいふ月形の釜のあるしみよりもやさるを釜比
市中の所々のやうにあるにあるを店先よりて郭巨
の鍋のやうにいかやくさくもある釜にて拾生ず
生を拾ふ大の歓よりのさ自釜人のよりるものも
とを又塵俗の世にもちるものもあるにすんで
多就の地紋にありけるとなるとよりて及ぶ所男
しむ人の手にくうるべしもけくくしく生を遊び
手奥後慈しく後の今ふ必しも茶よりるあるに
とてさひ拾るるものあるにむへうりに釜にてうよ
叶のくおるやうのみ名品の炉よ釜に湯を沸し茶
と煮るに外あるに言ふよ新炊を焚き竈の形り
鍋と煮るよ六人の用をもちりを大さ生をとるく

知ぬ我ら[illegible]奇妙なる[illegible]釜の名を
定るの年[illegible]黒[illegible]て此釜をはるかいにしへ[illegible]
渥を呼出りくしうせや此名を篇に呼せる我ら釜
うかゝ[illegible]我らされハ世の物[illegible]なる者[illegible]文
み[illegible]くうの御れとして[illegible]あ[illegible]信とはり
まより信義をとハ号せ[illegible]とをもよ蜘蛛を射
さり[illegible]姓を何と云む世に[illegible]より信
義をみて[illegible]信とはるあ[illegible]此釜と図
りの続うて釜屋を[illegible]後の名りと世り
ま[illegible]信[illegible]あれ此のもの[illegible]
る[illegible]ま[illegible]の[illegible]ん[illegible]茶釜[illegible]
ある物て字ハ[illegible]福[illegible]出せ[illegible]我ハこれらの[illegible]

いふ[illegible]年を[illegible]手[illegible]は茶釜[illegible]利
るあるて[illegible]の老農求[illegible]あ[illegible]信[illegible]
澤よ記て

与根岸氏　商潤別内津更歯事三止ゝ事

机よハ接ー根岸ハ[illegible]ハ[illegible]系屋の長物[illegible]
用るもあ[illegible]御よ捨[illegible]世[illegible]ハ[illegible]
名と三止[illegible]
はつきのあ[illegible]て[illegible]小屋乃棚を接ち
媒構の戸介あ[illegible]内津[illegible]の器よ[illegible]
る伝地[illegible]
くの[illegible]

漢和手引草序

俳諧の漢和昔々書き拙なるはかりより俗語
なるを一句の字と知るべき人ぶきもまつき昔なして俳今古
ある人も法式も定まるかなかふくるふ稀なれと国
書あるべし一字よ書き齋の主人山彦に於て天斯
文を助るやはらんも賀れ中より古き一帖を
法りとて猶字を加へこれに料理梅して
歯のあきなる味ひ安き一世と著して引るれ
ばしるべ和の俳士の徒に我八もより一句の狐
快なる狐くと撰者の求に応せて序者と作る一語
と贅も

香木記

むかし龍の絵を好る人あ赤の龍所を求て姿を
ゆゑて好む心信あれを拙に感意あるのあるも
あるに我家に花井某沈香乃名をぬて巷
堅山の久しきに手家に古く伝る印あるい
年経るに底なるも彼手くれ久ふ不白き角
乃拙ありとて求きて釜に入れ沸るにあるいは
き如なる香れ家よみちりてあるとして求る
の器に焼る印のあるを伝れるに実
木のなるものつ伝るて香の所のが
たちとくりくを問ふるに赤楠煙さまりぬ
名ものまゝ花井印と呼ん柯亭竹の笛焦尾

の姿を[illegible]ひ通るさらあつらひ
[illegible]て美しきみそれを白といふまい
洲の[illegible]ての[illegible]
久々の月の中[illegible]と掬ときけ[illegible]を白も
計なのあるやあるし

白の香や月の宴いきく初る

百話亭辞

今人の口を減し拙いを[illegible]のいふ[illegible]
人の[illegible]て[illegible]ハ[illegible]を[illegible]を減
[illegible]の句も[illegible]非れ
聴[illegible]ハ[illegible]の[illegible]て非れと

法[illegible]て[illegible]庚申堂の猫の如く耳をすまして
ハ[illegible]ハ[illegible]
拾[illegible]
[illegible]俳諧一時の談笑より[illegible]百話[illegible]
[illegible]
[illegible]
の後を[illegible]て中きを数百に満る時ハ[illegible]
妖物の出[illegible]
百話亭の[illegible]
[illegible]俳諧の[illegible]
女の首[illegible]
[illegible]ハ歩[illegible]
[illegible]踊り廻板動き出

[illegible]棚のあるうらにて[illegible]
[illegible]妖物の出るよハあるにて[illegible]
[illegible]くの法[illegible]は一章の文を結ぶ
御の戯[illegible]に付[illegible]
[illegible]百話[illegible]の[illegible]
了

狂歌洗耳序

[illegible]の[illegible]世
[illegible]水[illegible]
[illegible]
[illegible]

人ハ詩[illegible]
[illegible]
孝子洗耳[illegible]
[illegible]
我[illegible]
[illegible]
求[illegible]
[illegible]
四吊[illegible]

法[illegible]
[illegible]

知雨亭記

堺北の市中より打ちつゞきあのとみうり世に藥と
響く業にて表玄関の暖簾とうき世の風
まのひとも世にうる塵の移ることを思ひ孤松軒
の額を宗遍の用ゆ照しにて手紙よりあるひ詩を紙
又書をつゝとてうあ世の人をなとに門樂世の啓蒙
ハ家もつゝに吏侯祿侯のまゝにて南侯をいとん
うゝ梨昔伯休ハ冠も名も侯にて樂を愛ふんとて
うゝ安くうゝ忘れあ今ハ侯ハ侯にして愛る
あよ手ハとゝ侯る一日我ハ遠栖を敲くるとゝ
ゝ言歌をゝ侯りとゝ我ハ侯遍の客をもゝ侯れ
も程世に傳ふあよ四徹遊人ハ據さゝ風流の

閑を打る日ハ一ゝ世務に立ゝ人ゝ世に閑
をうる樂と鳥のゝへをゝ侯れ世ゝ侯れ
鳥ゝ侯れゝ樂ハ侯ゝ言のゝ侯ゝ侯ゝも
ゝ騒ゝ侯れゝ移ハ移ハ移ハ移ハ移ハ
ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ
ゝ言ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ
試ゝ侯ハ文言樂ハ南白ゝ侯ゝ侯ゝ我ハ
ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ
風宛居ハ兩の侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ
上國世臣の家ハ生ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ
父祖の祿を侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ
等を吟ゝ二十とゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ侯ゝ

作くゝよく屋と義しらるゝ如し一御ゝるまに志すに
まれ業の屋を家平てくみつゝ妖の皮を狐魯魂の
心雅を彫し辛ゝ蓬莱のもとに穴を穿くゝ世の外
ゝ餘齢をまるたゝ知面の因縁くのことし〻〻燒菊
ゝも迷ゝしとらてさつるゝ人ゝ〻穴を嗅つけく作る
栖も雨晴やゝ心〻叢ゝ屋をひろけく拾つゝみの
国を妨らるゝ者くゝ者くゝ〻ゝ〻ゝ麻宮
のゝ孤杉のあるゝ国綱おゝ尊るの人世につゝ
穴の狐ゝ〻ゝ〻ゝ心ゝ日ゝ布ゝ山御の沼茶
とまくけく我も糸快くゝとゝ〻〻

方十園記

あるゝ名ゝく方十園ゝ十八十四ゝ十ゝあゝ
所ゝあゝゝ及ゝもあゝ所ゝゝの同地ゝ宮ゝ山と
も築ゝて糸ゝも引ゝ水ゝこゝのゝ拾ゝして拾ゝ
巻ゝつゝゝあゝゝ世の人ゝもいゝみゝ宗ゝ入ゝゝて
此園とゝもゝはくゝこゝてみゝゝれとゝを拾く移嘆
ゝへゝ此ゝ〻ゝ安永四年閏猟月ゝ廿ゝ日ゝ
ゝゝゝ石ゝ十ゝ四ゝ日ゝ

指峯堂記

年ゝ十ゝ五ゝ歳ゝの好ゝの漢ゝあゝゝ世ゝゝ学と
いゝゝゝゝ書ゝ坊のゝ世ゝ商ゝ店のさま
くゝゝ中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

てて拝す音聲もさらに学ぶ文人雅士はるつさ
く我初の善るとつきとるべく誘はさるあきとのよを
るお家の人いさとぶす船泊るるの名てるうきり
ふよるべき店まあくけむ一毎の借金と探く衛壹
とていやうまし八之後の利と爭ひるがそち金
歳余のうへうてとれるさしもあしいてや京中
よ栖と求むるは以傳ることを貴る穴れよの所る
へき独りあるうてあるとれ門とくく号拙
指掌と定ふとて言いるるむあるもあるう
くとて手を封紙と書て求むされとるよこる
とむよまの志と表せるもの紙を指もの奥の海の
ちきとやあむ又小山の井の浅きとむいさ汲ぶぬ

手よりとむるるやうの天に泳ぎみとらい出るむ安ら
るたあるもあるていむつるきとくを造て
手よ解けとるよ似るり老情のるに吸ふとむつて
国辞とれるうけひるすとるれくまれ文達て
ひるるに書るとくく駅取次のるうとをちして
生と記るはせて紙るるとる

送有生記

西濃郡戸の里に世る栖る人の号を求るを送有生
の字を生て名指紙をとるよ号ふくとひの
調るるれて甚を志くして生るをはするく
以此京東八郡ひるい岐岬の大海流れ流れく毋

[illegible]る兼湾と屋代とを分てり西ハ角かしや伊勢より
近江の山くまて嶺をつゝき行く甚遠くはなれたる
所よりき極よ屏風をひらくごとくにかゝり塚下へつゞき
と風景の雪きよく岩よ豊業ハ見とゝ魅るあり
四季の佳観いひつくすまし行くを揚てる時名とゝを
せんされハ越ゆく徐歩時ゆたのるる明秋ハ稲業ハ
高に富一ゆハ素雪に浮ゆ舟ハ漁共夫月よのこゝを
遊るまゝ名れ共一字を添ゆ物名へとゝを出るハ
こゝろ詠ゆとゝ来ると兼の送ゆとゝ近ゆハ兼つ
へしとゝを以ゆ此二字よ定む漫ゆき新を惜むゆも
所謂東坡ゆ亭ハ裏金ゆの傑ゆ[illegible]む也あり
[illegible]

第旦の口号

舞洲に久くかくうゝ棲む者あり年ハ[illegible]
いくゝゆゝ人の問ひしゝ丸ゆと絳縣の老人の
むつゝきゆゝくハ知るゝもあるゝ後いくゝ
よゝゝ答ゆる

はゝて死ゆゝといひゝ四十も十ゆ有
つきゝ年よ面目も 形ゝ

杜鵑 并引

金森氏桂五子の庭よ一株の杜あり四杜よりゝ我
よ一絃を求らるゝ時求ハいゝゝゝゝよ慈母のゝゝ

かくて始まく聲迎ふる年すさひよろへし小松の主人
とともにつらなく尖墨素とこそまたく指ハ露も業
なへく鏡ハ面も清くへく今ハおりうりとそて手紙
なり女柱子の音如しも此糸ハあらそ呂さくらかと
まふく古体より歌糸子及へるなくしさかくお女の
琴と琴子なくすふき絃といふ曲より此その唱歌
を四句にしく仮名の韵をふあり自然にかへるものう
いと因果ありて光年なるまて光年琴らく琴の曲のここと
雅ら作りその求めに答ふ糸子琴のこえうしあれそ
年り

かりそめにうつして ますみ
人よ年年しわり

うつくし松ハ山すくゆか
人ハ千代とこそあれ

六康校

補遺

布袋屋風客句集序

風雅を学ぶ西東なるもの布袋屋を訪ハざるハなし訪へハ匂ひあるさる船〳〵句あれと訴せるもの〳〵

訴する者ニ石金吟ぎんぎんとして一独に帰りさるとて一ニの

年の夜怪奇きあら〳〵丙丁を延きて池魚の災

はんまよ及ひ年毎の災ひ諸〳〵一村の烏有ハ

ゑんぬ惜む〳〵慢む〳〵あるハ涙〳〵悔〳〵怪奇ハ

ゑ訴するをゑひ出〳〵ふるいつゝ一帖を起す

さるも甚しきかな〳〵この十に〳〵ゑれるもの及ぶ

されもあるこの年ゑ甚ハ老に徳ハやまに傳

ありて生より老ハ年ハ抜ゑ〳〵

はるか二ゑ後下廿三

序を清世ゑ〳〵ふるゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵

燈けハ消ゑ生ゑ蔵必落し〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵

より匂ゑ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

行の梅ゑの塞ゑ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

後さて〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

花のやうゑ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

明和癸未庚寅に集る古稀ゑ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

尾ゑ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵